広州の風

ODA民間モニター報告

<2>

伝わらない気持ち

誇り損なうやり方に疑問

98年の夏から2年間、私は中国広州の大学へ県から派遣され、暨南大学という学生数1万人を超える大学にこの援助について多くの学生は知らなかった。それは文学部の事務室や日本語学科の教員たちが積極的に学生で、日本語学科の教員として働いていた。その暨南大学も毎年、わずかではあるが、日本の書籍が寄付されるという形で政府開発援助（ODA）を受けていた。

しかし、残念なことに知らせていなかったからだ。このことに日本人の一人として疑問を持っていたのだけれど、ある日、その理由が分かった。

その日、日本語学科の主任の呂副教授と話をしていると、今日これから広州にある日本総領事館に例の書籍をもらう申請に行くのだと言う。いつもは明るい呂先生なのだけれど、今日の表情は暗い。聞くと、日本領事館での申請の際、プライドが少し傷つくのだと言う。

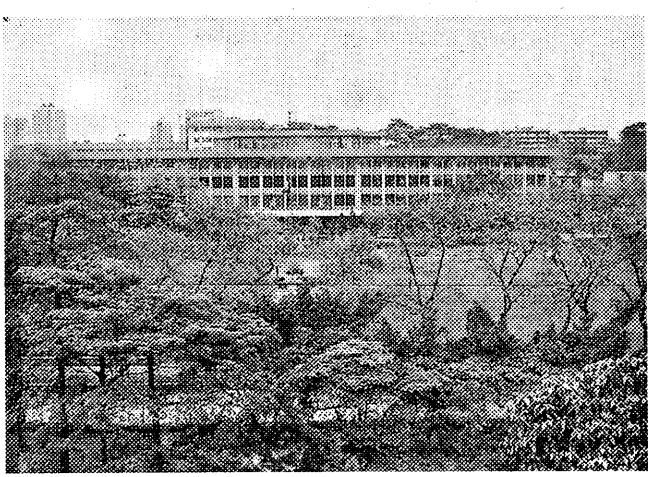
毎年、若い文化担当領事に呼び出され、ODAの趣旨についてレクチャーを受け、適切に使わなかったらペナルティーがあると注意され、やっと本の申請ができる。物をもらうために必要以上に頭を下げるような気がして嫌な気分になるのだと言う。

その領事の個人的な性格による部分も影響しているのだが、他の大学の先生の中にも呂先生と同じ印象を持つ人がいた。呂先生は決して反日的ではない。日本への留学経験もあり、日本人や日本の文化が好きだ。その彼がそう感じている。

呂先生は領事館から本を買ってもらうと言っていたが、それは国民の税金だ。せっかくの国民の税金がこんな悲しい使われ方をしている。せっかくの制度が最後のアンカーのところで中国側に気持ちが伝わらない。

01年の中国への無償資金協力63億円、技術協力78億円、有償資金協力1614億円は本当に有効に使われているのか、また、日本の意思がうまく伝わっているのか、それを今回の視察で知りたいと強く思っていた。

（ODA民間モニターとして昨年11月、現地視察に参加した名張西高校の中山隆之教諭、写真も）



暨南大学の図書館。3階の一角に日本語書籍コーナーがあり、日本語図書専門の司書がいる